



佐伯地区 医師会
ひぐち・こうしょう
樋口 公草先生

なるほど!! 健康講座

問合せ 廿日市市保健センター ☎ 1610

こどもによくある感染症

溶連菌感染症

治療

抗生剤の内服です。薬の種類によりませんが、5〜10日間の内服が必要で、また後で述べる合併症予防のためにも重要ですので、「熱が下がったから、残りの薬は次にとっておこう」ではなく、処方された通りに全て内服することが大事です。

溶連菌感染後の注意点

他の感染症と異なりやっかいな点は、治療後数週間して別の合併症を引き起こすおそれがあることです。その中でも急性糸球体腎炎が有名です。これは溶連菌感染後に1〜2週間、皮膚感染では3〜6週間して生じ、頻度としてはそれぞれ約5〜10%、約25%と言われています。症状はコーラ色の尿、尿量の減少、むくみ、高血圧などで、このような症状が現れた場合、多くは入院管理が必要となります。早めに受診してください。

また学校や保育所へ戻る時期ですが、適切な治療開始後24時間感染性は消失しますので、抗生剤の内服を開始して24時間たって、解熱していれば大丈夫です。

溶連菌感染は発熱や皮膚症状だけでなく、その後の合併症にも注意が必要です。医師の指示を守り、経過を確認していくことが大事です。

「昨日から熱が出ました。風邪かと思つて様子を見てたんですけど、今朝から体に小さなブツブツが出ていますし、ご飯も食べなくなつたんです」。

これは小児科外来で時々見られる光景ですが、これらは溶連菌感染症の症状でもあります。

溶連菌は、正確には溶血性連鎖球菌と呼び、溶連菌の中には小児の上気道（気道のうち、鼻、口から咽頭、喉頭まで）や皮膚などでの化膿性疾患の原因菌であるA群

β溶連菌や、新生児期の感染症として知られるB群β溶連菌など多くの種類がありますが、今回は、A群β溶連菌についてお話したいと思います。

このような症状があれば溶連菌？

典型的には、発熱、喉の痛み、食べ物を飲み込みにくいなどがあがり、扁桃腺は黄く灰白色の膿のようなもので覆われます。また全身に赤い小さな発疹を認め、治癒後

に手や足では皮がむけることもあります。皮膚への感染ではとびひ（伝染性膿痂疹）の原因菌としても知られており、小さな水ぶくれや、かさぶたを伴った病変を認めます。

溶連菌の診断は細菌の培養検査にて確定されますが、現在は喉を綿棒でぬぐって行う迅速検査により診断することができます。これは10分程度で検査結果が判明しますので、その場で診断することが可能です。